

令和 6 年 6 月 24 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20H01680

研究課題名（和文）世界で広まる品格教育の日本的展開の可能性について：エビデンスと視察を通して

研究課題名（英文）Developing a New Direction for Intervention of Character Strengths on Elementary School Children: Insights from Evidence and Visits to the UK Center

研究代表者

青木 多寿子（AOKI, Tazuko）

岡山大学・教育学域・教授

研究者番号：10212367

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 12,000,000円

研究成果の概要（和文）：世界で展開する強みの介入を行う研究では、小学生で必ずしも成果が出ていない。これについて強みに関する基礎データの収集、体力・身体活動量との関係、成人での強みとWell-beingの関係の3点から検討を行った。その結果、品格の強みは、U字型発達曲線を呈するため成果が見えにくいこと、児童の体力と活動量の実測値と品格に相関が見られたことから、児童期の介入方法として体力・身体活動の用いた介入が有効である可能性を示せたこと、強みはキャリア形成期の成人から高齢者までWell-beingと関係している、生涯役立つ教育になり得ることを示した。なお、英国視察はコロナ禍で断念し、この分の研究費は返納した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

社会的意義は次に集約できる。世界で展開する強みの介入研究が小学生で必ずしも成果が出ていない事実について、品格の強みは、U字型発達曲線を呈するため成果が見えにくいこと、児童期では、この時期飛躍的に伸びる体力、身体活動の実測値に基づく客観的なデータを用いて、品格と関係していることを示せたこと、縦断データから、人間関係に関わる強みを持っているとwell-beingが高くなる一方で、それ以外は幸福感が高ければ強みが育まれる、との関係を示したこと、である。これらはいずれも品格とwell-beingに関する介入に関する未着手の有用な知見であり、はQ1ジャーナルに掲載された。

研究成果の概要（英文）：Worldwide research on character-strength interventions has shown varying effectiveness, but making effective one for children are not clear. Our study explored the effective ways for them with three factors: 1) primary data on character-strength development, 2) the relationship between physical education PF and MVPA, and 3) clearing the lifelong activeness. The results were: 1) Character-strength scores from 4th to 9th graders followed a U-shaped growth curve, 2) character-strength are related with the measured PF and MVPA performance. Thus, these activities could be effective intervention methods for elementary children because they are at a crucial developmental stage, especially regarding their physical activities. 3) Character-strength is associated with well-being in retired-older-adults. These results demonstrate that effective character-strength interventions for school-age students have lifelong effectiveness. The visit to the UK was canceled because of COVID-19 pandemic.

研究分野：教育心理学，生徒指導論，発達心理学

キーワード：品格教育 Character strengths(強み) 体力 身体活動量 well-being 児童 体力・身体活動を通じた介入の可能性

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

Character(品性)は、刻み込む、彫り込むという意味があり、生後のよい「習慣」の形成で培われる人格の部分を目指す。米国生まれの品格教育は「よい市民」の育成を目指して1990年代にCEP(Character Education Partnership)が設立され、全米の優秀校を表彰する等、その普及活動に取り組み始めた。そこでは、11個の原理を定め、それに沿って respect, responsibility, perseverance 等、7,8個程度のギリシャ哲学に由来する Virtue を設定し、学校全体でこれに関してよい習慣を身につける教育を行うことを推奨している。また、この品格教育は、その後、世界中で展開を見せ、2015年にはイギリスで、イギリスの伝統的な市民教育と品格教育とが融合した世界最大のリサーチセンターも設立され、附属学校も設立された。

心理学の領域では、Park & Seligman (2004) が、人の Well-being を高めるポジティブ心理学の研究の一環として、character strength (強み) を定義した。そこでの character strengths とは、前述の respect, responsibility 等の virtue 一つ一つを「強み(character strengths)」と名付け、これを用いて人の幸福(well-being)にかかわる研究がなされ始めるようになった。その中で、Peterson and Seligman(2004)は、人の幸福 Well-being の関係に関係する「強み」を6領域(知恵と知識、勇気、人間性、正義、節度、超越性)、24種類示す強みのリスト(Values in Action Inventory of Strengths 以下、VIA-IS)を作成した。そして強みは青少年の well-being の向上に寄与するとの報告がなされ(Gillham et al., 2011; 井邑他, 2013; Toner et al., 2012)、強みの教育を通して子供の well-being を高めようとする教育実践が世界各国でなされるようになった(阿部他, 2021; 伊住他, 2021; Proctor et al., 2011; Quinlan et al., 2015; Rashid et al., 2013; Ruit & Korthagen, 2013)。しかし小学生を対象とした研究では、必ずしもよい成果が得られていない(伊住 et al., 2021, 他)。

私たちはその原因として、児童期の子ども達の認知発達に注意を払っていないからではないかと考えた。例えば、児童に対する強み教育は、その難解な哲学的・倫理的用語の理解を促すために説明を行ったり、物語を読んだり等、言語を介する方法に限定されているものが多い。この点、子ども達の認知発達に関する研究で、Piaget は、抽象概念を理解できる形式的操作の前には、感覚運動期、具体的操作期など、身体的な感覚、物質の操作をとおして認知を発達させることを示している(Flavell, 1963)。加えて、児童期の発達とは、スキルやパフォーマンスは単調増加的に伸びるとは限らず、時にU字型発達曲線を示すことが知られている(青木, 2002)。さらに、強みと well-being の関係について、well-being が高ければ強みが形成されるのか、強みがあれば well-being が高くなるのか等が明らかでない。これらのことから、児童期に効果的な強み教育を創るには、まず、それらの発達に関する基礎データを収集すること、次に、児童期の子ども達には抽象概念の理解が難解であることを考慮する必要があると考える。

他方で、児童期の子どもは、大人よりも身体活動が盛んで体力を形成する時期である(Wolff-Hughes et al., 2014)。つまり、児童期の子どもに有利なこの身体活動を通して強みを伝える方が、抽象的な思考が難しい児童には適した強み教育、つまり、品格教育を創りうる可能性があるのではなからうか。前述のように、Piaget はその一連の研究で、人が記号(言語)を用いて論理的に思考する前には、身体運動感覚や物を実際に操作して考える段階があることを示している。このことを考えると、身体活動を通して品格を教えることは、児童期の子ども達の認知発達の特徴に即した方法であることが予測できる。

前述のように、もし児童と強みの関係がわかれば、言語能力が未熟な幼児にも強みを教える方法を開発に結びつく。日本には古くから、各学校を「自主自律 豊かな心で たくましく(岡山大学附属中学校)」「思いやる子 自ら学ぶ子 たくましい子(岡山市立津島小学校)」等、学校目標を「知・徳・体」から1つずつ言葉を選んでいる所は多い。他方で米国、イギリスの品格教育は、それぞれ独自の国の市民教育と結びついて発展している。そして、加えて日本では市民活動は必ずしも盛んではないことを考えると、同じ発展の方法を踏襲したのでは根付かない可能性が高い。そこで日本独自の品格教育を考える時、この「知・徳・体」を応用できないかと考えた。

考えてみれば、身体を動かすには、まず自らの意思が必要となる。つまり主体性が関与する。加えて、身体を動かして世界を操作すれば、必ずそのフィードバックを目にすることができる。つまり、身体活動で言えば、同じ運動を繰り返せばスキルの向上という、目に見える形でフィードバックをえられ、できるようになることで自信もつく。児童にもわかりやすいこの即時フィードバックによって向上心が培われ、体全体を通してチャレンジすること、根気強く続けることが成果を体感できる可能性は高い。このように考えると、体力・身体的活動は品格教育の強みの形成に関係している可能性は高いと考えられるだろう。

他方で、強みと Well-being との関係についてはもう一つ問題がある。それは、井邑ら(2013)の研究で、小中学生では強みと well-being の関係は示されているが、日本の成人や高齢者にもこの関係が見られるのかが明らかでないことである。もし、強みと well-being の間の生の関係が成人期や高齢者で見られないのであれば、小中学校で教育に力を入れても意味がないことになる。そこで品格の強みは、生涯にわたって Well-being の関係しているのかを併せて検討する。

2. 研究の目的

研究申請時の目的は、上記に述べた、体力・身体活動と強みの関係について検討すること、社会人対象の Well-being に関する Web 調査を実施すること、の他に、世界最大のイギリス

のセンターとその附属学校を視察して、教育心理学、教育評価、倫理学、特別支援教育のそれぞれの視点からイギリス式の品格教育について米国との比較で考察して日本式品格教育の可能性を検討すること、日本の生徒指導提要からキーワードを抜き出し、強み(character strengths, virtue)と対応させること、の4つの目的があった。

しかし については、当初計画していた令和3年は、コロナウイルスによる緊急事態宣言下で世界中の多くの国で出入りができなかった。このため、翌年に繰り越し申請を行ったが、この年も日本の水際対策の緩和が令和4年10月以降となり、この10月以降でイギリス側との訪問の日程調整がかなわなかった。そこで再度の繰り越し申請を行ったが認められなかった。こうして、イギリス視察に関する研究は中止して、その分の研究費を返納した。

については、本研究が採択されたのち、生徒指導提要の改訂が文部科学省から発表された。そこで改訂版が公表されるのを待ったが、改訂後の生徒指導提要がWeb公開されたのが令和4年12月27日であった。本研究の研究期間の終了まで1年と少ししか時間がなかったため、こちらは思うように研究が進まない事態となった。

これらの経緯をから、実施が可能なデータの量的解析について、申請時よりさらに充実させることとした。具体的には、前回の申請分で収集したデータのうち、まだ分析途中だった基礎的データ(強みの発達的变化、強みとWell-beingの関係に関する縦断データ)の論文化、予定していたWeb調査に中国を加えた充実化に予算を回した。生涯発達を調べるWeb調査では、年齢幅も4相(キャリア形成期、家庭形成期、社会的充実期、退職後)として収集して検討することにした。

以上のことから、児童を対象に、(1)強みに関する基礎データを収集し、(2)体力・身体活動量との関係を検討して(3)成人においても強みはWell-beingと関係しているのかを検討する。その際、(1)については、強みについての発達的变化、縦断データを用いた強みとwell-beingの関係を、(3)については、日本だけでなく、中国のデータも収集して検討することにした。

3. 研究の方法

小学生の強みについては、井邑他(2013)が開発した26項目、4カテゴリで測定できる「Character Strengths Scale for Children in Japan」(2013)を用いた。4つのカテゴリとは「根気 誠実」「勇気-工夫」「寛大 感謝」「フェア 配慮」の4次元で構成されている。well-beingについては、同じく井邑他(2013)が開発した、生活充実感、ソーシャルサポート、ホープ、主観的幸福感の4尺度を用いた。なお、本稿では、respect, responsibility等、character strengthsの一つ一つを「強み」と呼び、「強み」のセットを教える教育を品格教育(character education)として区別する。

(1) 強みに関する基礎データの収集

品格の発達的变化 2つの市から小学校4年生191名、5年生267名、6年生268名、中学1年生166名、2年生157名が参加し、アンケートに回答した。

品格とWell-beingの関係に関する縦断データの解析 2012年5月(Time 1)と2013年5月(Time 2)の2時点で、参加者は同じアンケートに回答した。参加したのはTime 2時点で小学校6年生59名、中学1年生46名、2年生103名、3年生22名であった。

(2) 体力・身体活動量と強みの関係

公立小学校1校から認可を得て、4年生から6年生まで児童で、インフォームドコンセントを得た。欠損データのある参加者を除外した後、473人の参加者(男児247人、女児226人)を研究対象とした。文部科学省の体力・運動能力に関する全国統計調査(文部科学省1999)に基づき、50メートル走、ソフトボール投げ、シャトルラン等、8項目を実施したほか、加速度計を週末2日と平日6日を含む8日間連続で腰に装着し、身体活動量を測定した。

(3) 成人を対象とした強みとWell-beingに関するWeb調査

研究期間内に分析が終わったのは高齢者(60歳以上)とキャリア形成期の若者(22歳~30歳)分である。高齢者については日本からは182人(男性89人、女性93人;61歳~92歳)、中国からは158人(男性54人、女性104人;61-79歳)が、キャリア形成期の若者については日本124人(男性59人、女性65人)、中国からは186人(男性92人、女性94人)が参加した。

この研究を実施するに当たって、まずPeterson & Seligman(2004)の24種類の強みを24項目で測定できるValues in Action Inventory of Strengthsの簡易版Character Strengths Rating Form(CSRF;Ruch, Martinez-Marti, Peyer, & Harzer,2014)を日本語と中国語に丁寧に翻訳した(青木・李・曹,2022)。Well-beingについてはPeterson & Seligmanが開発したPERMに否定的な感情、孤独感、全体的な幸福感が追加されたPERM-Profiler(Butler & Kern, 2016)を採用し、これも丁寧に翻訳した。データは、トラップ質問を使用してスクリーニングした。

4. 研究成果

(1) 強みに関する基礎データの収集

まず明らかになったのは、強みの発達は小学校4年生が一番高く、中学生が低いことである。つまり、逆U字型の発達を呈することが明らかになった。世界各地で実施されている強み教育において、小学生で必ずしも成果が明確でないのは、一つには、全体として強みの教育の効果が見られない可能性が示唆された。しかし共分散構造分析の結果、前青年期になっても強みとwell-beingには関連があることも示すことができた(青木・井邑,2024)。

次に、縦断研究からは、品格と Well-being の関係について次のことを示すことができた。まず 2 時点での比較を考える際、2 方向の関係が想定できることを確認しておきたい。つまり、品格が高ければ Well-being が高くなるのか、もしくは Well-being が高ければ、品格が高くなるのか、の 2 方向である。分析の結果、まず、品格の Time 1 と Time 2 の比較では強い正の関係が見られた。よって、品格の強さはかなり安定している様子が窺えた。つぎに Well-being の関係については、ホープ、つまり将来への希望は品格とは関係がみられなかった。 については、ソーシャルサポートと主観的幸福感にこの関係が見られた。品格が高ければ仲間からのサポートを得やすく、幸福を感じやすいことが窺えた。 については、生活充実感、主観的幸福感に関係が見られた。つまり日々充実していて幸福感が高いと、品格が高くなる、との関係であった。他方で、将来の展望に関わるホープについては、品格ではなく、別の要因が関与している可能性が考えられる。

以上のことから、世界の品格教育において、小学生では必ずしも明確な成果が出ていない理由として、その成長曲線は U 字型発達曲線を示すこと、品格と Well-being の関係は、強みの種類によって異なることを示すことができた。

(2) 体力・身体活動量と強みの関係

Table 1 に、体力テストの結果、Table 2 に体力と品格の関係を示した。その結果、男子では合計スコアが忍耐力-正直さ、勇気-アイデア、思いやり-感謝、公平さ-ケアと ($p < 0.05$)、女子では合計スコアは、根気-誠実、勇気-工夫、寛大-感謝と有意に関連していた ($p < 0.05$)。Table 3 には強みと身体活動量の関係を示した。ここで身体活動量は、総歩数、中程度以上の激しい身体活動(MVPA)の 2 種類に分けて関係を示した。その結果、男子では根気-誠実の総歩数、の MVPA と、勇気-工夫は の総歩数と有意に関連していた ($p < 0.05$)。女子では根気-誠実の MVPA と関連していた ($p < 0.05$)。

先行研究では、大人においては品格と身体的な健康に関連があることが示されている (Proyer, et al., 2013; Stuntz, 2017, 2019)。児童の体力や身体活動は精神的側面と正の関連があることが報告されている (Janssen & LeBlanc, 2010; Poitras et al., 2016)。加えて体力が高くなると、うつ病、不安、自尊心、学業成績、身体的健康にプラスの効果をもたらすことも報告されている (Ortega et al., 2008)。また、子供の体力と身体活動量は大人になっても影響することから (Malina, 2001; Telama, 2009)、児童期にこれらを促進することが重要だとされている。そして本研究では、児童の体力と身体的活動量の実測値を用いて、品格の強みとの正の関連を示すことができた。特に、根気-誠実、勇気-工夫の品格との関連が見られたのは、やはり身体的な活動については、チャレンジしたり、日々努力することでスキルの向上を自分で確かめることができることが影響しているように考えられる。

他方で、性別に目を向けると、品格と体力、身体活動量との関係では女子よりも男子の方が関連が高く、特に男子は 4 つの側面すべてと体力の間に正の相関が見られた。他方で女子では男子ほど関連が見られなかった。身体活動を通した品格の教育は、男子において特に有効だと言えるであろう。

以上の結果から、小学生を対象に品格についての介入研究を行う際、難解で抽象的な言語の解説や読み物だけでなく、子どもの体力、身体的な活動を通した介入方法を工夫することが、児童生徒の品性の高さ、Well-being を高め、児童の心身の良好な発達を促進する可能性を示すことができた。

(3) 成人を対象とした強みと Well-being に関する Web 調査

退職者が多い年齢層の分析では、日本でも中国でも、24 項目の強みは Well-being と関連していた。特に日本では、孤独感やネガティブ感情について、マイナスの相関が見られたことから、強みは幸福感を高め、ネガティブ感情を低くすることが窺えた。また、日本の高齢者では、熱意、親切、そしてユーモアが Well-being との相関が高いこと、キャリア形成期の若者では、24 の品格の中には Well-being につながっていない強みもあることがわかった。特に、日本の高齢者に見られた孤独感、ネガティブ感情とのマイナスの関係はキャリア形成期の若者には見られなかった。加えて well-being との相関係数が高かったのは、日本では熱意、批判的思考、チームワーク、中国では創造性、好奇心、熱意、社会的知性、チームワークであった。これらのことから、学校教育で培う強みとしては、熱意やチームワークがキャリア形成期には well-being につながる強みである可能性を示すことができた。

結論

本研究の貢献は、次に集約できる。世界で展開する強みの介入研究が小学生で必ずしも成果が出ていない事実について、品格の強みは、U 字型発達曲線を呈するため成果が見えにくいこと、抽象的な言語を解説する現在の介入方法に代わって児童期の介入方法として期待できるのが、この時期飛躍的に伸びる体力、身体活動量を基礎にする介入方法である点を、客観的データの関係で示すことができたこと、強みと Well-being についての生涯発達の研究から、強みの介入は生涯にわたって幸福感に寄与する教育となり得ること、を示した。これらはいずれも、効果的な強みの介入研究につながる結果であり、世界でもまだ未着手の研究である。特に体力・身体活動量と品格の関係に関する研究は影響力の高い雑誌に採択されたことから、今後、インパクトを与えることが期待できる。

Supplementary Table 1. Physical fitness of participants.

	Boys (n = 247)			Girls (n = 226)		
	Fourth-grade (n = 106)	Fifth-grade (n = 66)	Sixth-grade (n = 75)	Fourth-grade (n = 113)	Fifth-grade (n = 54)	Sixth-grade (n = 59)
Hand grip (kg)	15.6 (2.7)	16.8 (2.6)	21.0 (4.8)	14.0 (2.4)	17.0 (3.5)	19.7 (4.0)
Sit-ups (count)	18.6 (5.3)	20.8 (4.7)	21.6 (4.5)	16.6 (5.4)	19.9 (6.2)	18.1 (3.6)
Sit and reach (cm)	29.9 (5.9)	34.4 (7.0)	32.7 (7.5)	33.1 (6.1)	41.5 (6.8)	37.4 (6.7)
Side-to-side jump (count)	41.8 (6.2)	44.6 (6.6)	46.6 (5.6)	40.1 (6.1)	41.9 (7.8)	43.8 (4.8)
20m shuttle run (count)	42.9 (17.1)	49.0 (19.0)	58.2 (19.6)	37.0 (13.3)	41.7 (16.2)	44.0 (11.7)
50m dash (s)	9.9 (1.3)	9.3 (0.7)	8.9 (0.8)	10.1 (0.7)	9.6 (0.9)	9.2 (0.7)
Standing broad jump (cm)	146.1 (19.7)	153.6 (16.0)	166.3 (21.5)	137.9 (16.4)	146.9 (16.9)	154.5 (17.9)
Softball throwing (m)	19.1 (7.3)	22.0 (7.2)	26.3 (10.1)	12.7 (4.5)	14.4 (4.6)	17.3 (5.6)
Total score	49.9 (8.1)	55.6 (8.1)	60.2 (9.6)	50.6 (7.7)	58.0 (8.4)	60.5 (7.8)

Note. Values are means (standard deviations).

Supplementary Table 2. Relationship between character strengths and physical fitness (Pearson correlation tests).

	Hand grip ¹		Sit-ups ²		Sit and reach ³		Side-to-side jump ⁴		20m shuttle run ⁵		50m dash ⁶		Standing broad jump ⁷		Softball throwing ⁸		Total score	
	r	p value	r	p value	r	p value	r	p value	r	p value	r	p value	r	p value	r	p value	r	p value
Boys (n = 247)																		
Perseverance-honesty	0.09	0.15	0.20	0.00	0.17	0.01	0.26	0.00	0.23	0.00	0.24	0.00	0.15	0.02	0.12	0.07	0.27	0.00
Courage-ideas	0.17	0.01	0.19	0.00	0.13	0.04	0.21	0.00	0.27	0.00	0.12	0.07	0.14	0.03	0.16	0.01	0.25	0.00
Compassion-gratitude	0.10	0.12	0.15	0.02	0.23	0.00	0.18	0.00	0.22	0.00	0.13	0.04	0.10	0.11	0.19	0.00	0.23	0.00
Fairness-care	0.09	0.16	0.13	0.04	0.21	0.00	0.15	0.02	0.19	0.00	0.09	0.17	0.13	0.04	0.14	0.03	0.20	0.00
Girls (n = 226)																		
Perseverance-honesty	0.00	0.95	0.12	0.07	0.09	0.16	0.14	0.03	0.18	0.01	0.16	0.02	0.16	0.01	0.08	0.26	0.17	0.01
Courage-ideas	0.05	0.45	0.15	0.02	0.01	0.89	0.26	0.00	0.20	0.00	0.21	0.00	0.21	0.00	0.26	0.00	0.26	0.00
Compassion-gratitude	0.07	0.26	0.16	0.02	0.19	0.00	0.12	0.07	0.12	0.08	0.12	0.09	0.16	0.02	0.09	0.18	0.19	0.00
Fairness-care	0.11	0.11	0.16	0.02	0.06	0.40	0.12	0.07	0.07	0.32	0.02	0.77	0.08	0.25	0.06	0.33	0.13	0.06

Note. ¹muscle strength; ²abdominal strength and endurance; ³flexibility; ⁴agility; ⁵cardiorespiratory endurance; ⁶speed; ⁷explosive leg strength; ⁸explosive arm strength and throwing ability; Boldface indicates statistical significance for Pearson correlation tests ($p < 0.05$).

Table 3. Relationship between character strengths and physical activity.

	Total steps		MVPA	
	r	p value	r	p value
Boys (n = 106)				
Perseverance-honesty	0.26	0.01	0.21	0.03
Courage-ideas	0.20	0.04	0.16	0.10
Compassion-gratitude	0.13	0.20	0.07	0.48
Fairness-care	0.10	0.30	0.05	0.64
Girls (n = 113)				
Perseverance-honesty	0.17	0.07	0.19	0.05
Courage-ideas	0.13	0.16	0.11	0.26
Compassion-gratitude	0.15	0.12	0.16	0.08
Fairness-care	-0.02	0.81	0.00	0.99

Note. MVPA; moderate-to-vigorous physical activity; Boldface indicates statistical significance for Pearson correlation tests ($p < 0.05$).

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 Sasayama Kensaku, Imura Tomoya, Adachi Minoru, Aoki Tazuko, Li Minglu	4. 巻 11
2. 論文標題 Positive relationships of character strengths with fitness and physical activity in primary school children	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Health Psychology and Behavioral Medicine	6. 最初と最後の頁 0
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/21642850.2023.2278290	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 青木 多寿子、井邑 智哉	4. 巻 8
2. 論文標題 児童・生徒における品格の発達プロセスと性差：Well-beingとの関連を通してみた学校教育への提案	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 佐賀大学大学院学校教育学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 186～196
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34551/0002000568	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Yamada Tsuyoshi, Okada Kensuke	4. 巻 51
2. 論文標題 Bayes factor for single-case ABAB design data	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Behaviormetrika	6. 最初と最後の頁 277～286
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s41237-023-00206-1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 青木 多寿子、李 明路、曹 立勤	4. 巻 181
2. 論文標題 Values in Action Inventory of Strengths の簡易版, Character Strengths Rating Form (CSRF) の日中翻訳	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 岡山大学大学院教育学研究科研究集録	6. 最初と最後の頁 41～45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18926/bgeou/64184	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 井邑 智哉、青木 多寿子	4. 巻 6
2. 論文標題 児童生徒の品格とWell-beingの関連：縦断データを用いた検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 佐賀大学大学院学校教育学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 102 - 109
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34551/00023188	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山田剛史	4. 巻 33
2. 論文標題 一事例実験のデザインと分析方法について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 発達心理学研究	6. 最初と最後の頁 287-303
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山田剛史・堀一輝・福原弘岳	4. 巻 41
2. 論文標題 項目反応理論の入門	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 精神科	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新茂之	4. 巻 72
2. 論文標題 J.S.ミル『論理学大系』における帰納の要諦 - 数学的機能を巡って -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 文化學年報	6. 最初と最後の頁 75 - 100
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Tomoya IMURA, Kensaku SASAYAMA, Minoru ADACHI, Tazuko AOKI and Minglu LI
2. 発表標題 Relationship between character strengths and well-being in primary school children: Mediating effects of health behaviors.
3. 学会等名 International Positive Psychology Association 8th IPPA World Congress 2023 (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Kensaku SASAYAMA, Tomoya IMURA, Minoru ADACHI, Tazuko AOKI and Minglu LI
2. 発表標題 Relationship between character strengths, objective physical fitness, and physical activity in primary school children.
3. 学会等名 International Positive Psychology Association 8th IPPA World Congress 2023 (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Tazuko AOKI, Minglu LI, Tomoya IMURA, Kensaku SASAYAMA and Minoru ADACHI
2. 発表標題 Character strengths and well-being among older adults in East Asia: Study 1 with data from Japan
3. 学会等名 International Positive Psychology Association 8th IPPA World Congress 2023 (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 李明路・青木多寿子
2. 発表標題 Character Strengthsは中日で一致するのか
3. 学会等名 日本心理学会第86回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 長野真弓・足立稔
2. 発表標題 中学校1年生における欠席の関連要因の探索 - 地方都市国立大学附属中学校における縦断調査のベースラインデータから
3. 学会等名 第68回日本学校保健学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 長野真弓・足立稔
2. 発表標題 小学校2年生時の体力と3年後の抑うつ・不安症状保有との関連性—地方都市郊外の小学校における縦断調査データから
3. 学会等名 第21回日本発育発達学会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 堀一輝・福原弘岳・山田剛史	4. 発行年 2023年
2. 出版社 朝倉書店	5. 総ページ数 184
3. 書名 RとRStudioによる教育テストデータの解析	

1. 著者名 新茂之	4. 発行年 2023年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 185
3. 書名 立山善康編『ケアリングの視座』第13章 人間のあり方としてのケア	

1. 著者名 青木多寿子 第13章「持続可能な心理教育に向けて - 米国の優秀校での体験を通して -」山崎勝之(編著)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 305
3. 書名 日本の心理教育プログラム	

1. 著者名 新 茂之「パースのプラグマティズム-科学的探求における連続体の位置-」行安茂(編著)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 北樹出版	5. 総ページ数 294
3. 書名 「パースのプラグマティズム-科学的探求における連続体の位置-」『デューイの思想形成と経験の成長過程 - デューイ没後70周年記念論文集』	

1. 著者名 山田剛史, 金森保智, 石井浩基, 泉 毅	4. 発行年 2022年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 216
3. 書名 エピソードで学ぶ統計リテラシー	

1. 著者名 山田剛史 「発達研究のシステム法」 二宮克美, 他(編)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 1250
3. 書名 児童心理学・発達心理学ハンドブック(第一巻)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山田 剛史 (Yamada Tsuyoshi) (10334252)	横浜市立大学・都市社会文化研究科・教授 (22701)	
研究分担者	川合 紀宗 (Kawai Norimune) (20467757)	広島大学・ダイバーシティ & インクルージョン推進機構・教授 (15401)	
研究分担者	笹山 健作 (Ssayama Kensaku) (20780729)	三重大学・教育学部・准教授 (14101)	
研究分担者	宮崎 宏志 (Miyazaki Hiroshi) (30294391)	岡山大学・教育学域・准教授 (15301)	
研究分担者	足立 稔 (Adachi Minoru) (70271054)	岡山大学・教育学域・教授 (15301)	
研究分担者	新 茂之 (Atarashi Shigeyuki) (80343648)	同志社大学・文学部・教授 (34310)	
研究分担者	井邑 智哉 (Imura Tomoya) (80713479)	佐賀大学・学校教育学研究科・准教授 (17201)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------